

木の家が優しさ伝える ①

生
活

日本古来の建築技法を現代によみがえらせた「板倉構法」の考案者が筑波大学の安藤邦広名誉教授(65)である。東日本大震災の後、被災地で板倉構法を使った「木の家」の普及に奔走している。福島県いわき市と会津若松市に立つ198戸の木造仮設住宅は、長い避難生活を送る被災者から「まるで自分の家のように安らげる」と好評だ。

板倉構法の源流は正倉院(奈良市)や伊勢神宮(三重県伊勢市)で使われている板倉造りです。通常の3倍の量の木材を使うこの構法は、古来、神様を祭る「宮」や財産をしまつ「倉」など、大切なものを保管する建物に使われてきました。木ので室内の温度や湿度を適度に保ち、耐震、防火性に優れているからです。

筑波大学名誉教授

あんど うくにひろ
安藤 邦広 さん



「木の家」は廃れていきました。主要な部



日本古来の木造技法を再現

震災復興を再評価の契機に

しかし戦後、極端な住宅不足になった日本ではコンクリートと鋼材を使ったプレハブ建築が急成長を遂げて「木の家」は廃れていきました。主要な部

材を工場で集中生産するプレハブは大衆供給に向いており、それを時代が求めたのです。代償として日本の林業は衰退し木と共存してきた日本人の生活様式も崩れました。効率を追求したコンクリートと鉄の家は、都会で働く人に向いています。しかし、安らぎを求める老人や子供には木の家が必要です。心に大きな

な傷を負った被災者にも。震災からの復興が木の家を再評価するきっかけになってほしいと願っています。

2011年3月11日、私は大学の研究室で強烈な揺れに襲われ、建物の構造上、一番安全な廊下に学生を誘導しました。実はこの研究棟は耐震補強を施したばかりで、「どんな地震が来ても大丈夫」と

板倉の家第1作の仙台市の実家は建具が外に飛び出すほどの揺れに見舞われましたが、電話で聞くと「建物自体は大丈夫」でした。板倉のものが変形して振動を吸収する板倉は地震に強いのです。

3月12日、福島県で原子力発電所が水素爆発を起こしました。風向きによっては放射性物質がこちらに来る」と考えた私は13日、研究室所属の学生や研究員を実家に帰し、自分の家族も孫の出産を控えていたこともあって、福岡県の親戚宅に避難しました。

思っていたのですが、あの時はさすがに「つぶれるんじゃないか」と慌てました。

次の日は自分が設計した板倉構法の家の被害状況を確認に行きました。建築家というのは地震や台風があると、自分の仕事心配で仕方がないものです。8軒ともちゃんと持ちこたえていました。

しかし福岡に向かう飛行機の中で、私は「逃げた後ろめたさ」を感じていました。何かしていないと不安で、機中でスケッチに没頭しました。それは板倉構法を使った仮設住宅の設計図でした。

この連載は編集委員の大西康之が担当します。

木の家が優しさ伝える ②

2011年3月11日の東日本大震災の発生直後に、自らが考案した「板倉構法」による仮設住宅の建設を決心した。前例のない試みに行政は尻込みをしたが「被災者が安らげる木の家を建てたい」という安藤氏の執念が多くの人を巻き込み、構想は実現に向かった。

阪神大震災や新潟県中越地震の追跡調査で、プレハブ仮設住宅での生活が長くなると被災者にストレスがたまり、孤独死や生活意欲の低下につながる事が分かっていました。だから、被災地に木の家を建てる事が復興の第一歩になるという確信がありました。

3月16日、構想を実行に移すため、徳島県に仮の拠点を設けました。これまで建設してきた板倉構法の家に木材を供給してくれた那賀川すぎ共販協同組合(阿南市)の毛

あんど うくにひろ
安藤 邦広 さん

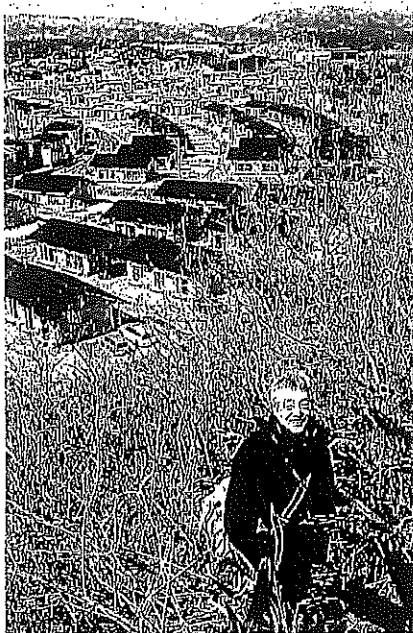
筑波大学名誉教授



デルハウスを借り、スタッフを呼び寄せました。三日三晩ほぼ徹夜で図面を引き、仮設住宅の標準とされる10坪の家の見積もりを作ったのです。

三日三晩徹夜で仮設を設計

行政の壁越え「つち音」響く



いわき市の木造仮設住宅
で写真 齋藤さだむ

プランを作っただけでは木の仮設住宅はできません。建築家、学者、役人。思いつく限りの人々に協力を呼びかけました。「一緒にやりましょう」と言ってくれたのが私の教え子で、福島県で木造建築を普及させる「奥会津IOR I俱樂部」(三島町)を運営している金親丈史さんでした。

まず越えなくてはならない

壁は、各県とプレハブ建築協会が交わしている協定でした。国は大規模災害に備え、迅速に仮設住宅が建てられるよう、業界にプレハブ資材のストックを頼んでおり、有事には優先的にそれを使う約束になっているのです。

3月下旬、金親さんたちと福島県に木造仮設住宅の構想を持ち込むと、案の定「仮設

なったのです。

福島県は地域振興につなげるためにも木造仮設を造ることを決め、4月上旬に計画を公募したのです。木材を供給する那賀川すぎ共販協同組合、福島県の有力建設会社である佐久間建設工業(三島町)と綿密なプランを練っていた我々は、すぐさま応募し、いわき市に162戸、会津若松市に36戸の木造仮設を板倉構法で建てることになりました。木材を木づちでたたく音を聞きつけ、近隣の住人が集まりました。あれが本物の「復興のつち音」です。

いわき市で第1期の工事が終わり、入居が始まった時、高齢のご夫婦が視察に見え、奥様がこう言われました。

住宅はプレハブと決まっていたと断られてしまいました。しかしその2週間後、思わぬ展開が待っていました。震災で被災した住宅は20万戸。菅直人首相は「お盆までに7万戸の仮設住宅を造れ」と命じましたが、プレハブ業界が「夏までには3万戸しか造れない」と困難な状況が明確に

「お父さん、なんだか自分のうちに帰ってきたみたいだね」。なんとか役に立ててよかったの一言に尽きる思いでした。

木の家が優しさ伝える ③

生
活

建築を志した学生時代は「丹下健三のようになりたい」と思っていた。東京大学で師事した内田祥哉教授はプレハブ建築の権威だったが、弟子の安藤氏には「木造建築をやれ」と勧めた。安藤氏は日本の木造建築の奥深さに目覚めていく。

九州芸術工科大学（2003年、九州大学に統合）で環境デザインを学び、東大の建築学科で助手になりました。師事した内田先生は「プレハブの大家でしたが、弟子には「時代にあった建築をやれ」と教えていました。

先生がプレハブを考案したのは戦後の復興期、年間200万戸の住宅が必要とされた時代です。大工さんが建てる家は年間50万戸の供給が限界だったので、先生は住宅を工場で量産する仕組みを考えました。やがて大手住宅メーカー

筑波大学名誉教授

あんど うくにひろ
安藤 邦広 さん

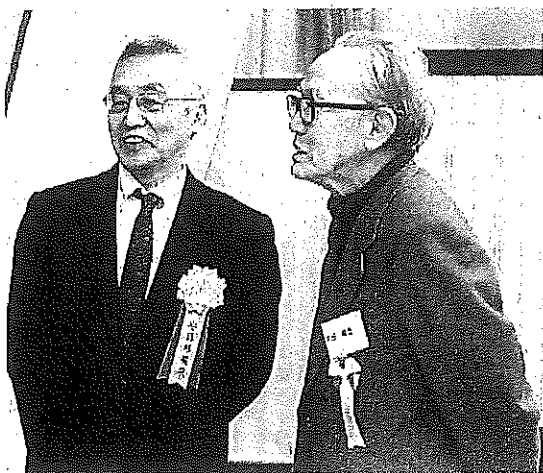


が育ち、プレハブ住宅は一大産業になりました。

しかし我々には「これから日本は木造建築だ」と教え、先生自身も後半生は木造建築の研究に力を注ぎました。

戦中、戦後の日本は森林資源を全部使ってしまったから木の家を建てたくても建てられなかったが、森林資源が回復した今なら建てられるからです。

日本は世界最古の木造建築である法隆寺や、伝統建築としては世界最大級の東大寺大仏殿がある国です。しかし戦



恩師・内田祥哉氏[㊦]と

ひかれたのは民家や町家です。東大助手の10年間、青森から沖縄まで古民家を訪ね、その多様性に魅了されました。日本民俗学の始まりとされる柳田国男の「遠野物語」の民家版をやりたいと思うように

プレハブ建築の権威に師事

「伝統を見直せ」古民家巡る

になりました。

後は東京一極集中で高層ビルばかりが目立って、木造建築は忘れられてしまった。その伝統を見直せと教えられたのです。

木造にも社寺建築から大規模建築を可能にする新木造までいろいろありますが、私が

半年ほど田中さんにくっついて現場に通いましたが、すごいと思ったのは古い技法を現代にのみがえらせる柔軟さでした。様々な工夫で建築基準などの規制を乗り越え「どんなもんだ」と自慢されるのです。26年前、仙台市の実家を建て替えるにあたって実際に板倉の家をつくったのも、田中さんの後に続きたいという強い思いがあったからです。

日本の古民家には必ず深いひさしがある。ひさしの下は家の中でも外でもない中間帯で、近所の人と立ち話したり、子供が遊んだり、お年寄りが夕涼みをしたりする空間です。ひさしの下、つまり軒下がコミュニティを成り立たせている。民話に作家がいないうように、古民家に設計者はいない。生活の積み重ね、人々の経験で自然と出来上がった様式です。その伝統がなくたっては大変です。

木の家が優しさ伝える ④

福島県に建てた198戸の「板倉の仮設住宅」は大いに好評で、他の被災地からも多くの見学者が訪れた。その中の一人が安藤氏に持ちかけた。「この板倉構法で復興住宅を建てられないか」。安藤氏の新たな挑戦が始まった。

「板倉の家を復興の拠点にしたい」と相談に来られたのは、宮城県南三陸町で活動しているボランティアの方でした。私にも故郷の宮城県で何か役に立ちたいという気持ちがあり、すぐに動き出しました。

まず南三陸町内に土地を借りてもらってモデルハウスを建てました。木材と加工は徳島県的那賀川すぎ共販協同組合、瓦は新潟県の瓦製造組合、まきストープはメーカーに寄付してもらいました。

場所は津波被害の象徴的存在

医療

筑波大学名誉教授

あんど うくにひろ
安藤 邦広 さん



在となった南三陸町防災対策庁舎の近くです。「さんたろう館」と名付けました。「さん」は杉の音読み、「たろう」はフィンランド語で家、「杉の家」という意味です。

地元のひとつに杉を活用した「板倉の家」を知ってもらおうと思った

のですが、人が集まらないので、こちらから仮設住宅に向くことにしました。被災者はどんな家を望んでいるのか聞かためです。一番切実なのはお金の問題でした。我々が提案したモデル



南三陸町入谷の松野や食堂の上棟式

再建する費用は「1000万円が限界だ」というのです。被災者は高齢者が多く、子供は都会へ出てしまったのでローンは組めません。20坪の家でも1坪50万円以下にしなればなりません。

地元で復興支援の団体を運営している渡辺啓さんなどと知恵を絞って出てきたアイデアが「互助会」でした。三陸地方には「契約講」と呼ぶ慣習

板倉の家で人手がかかるのは、山で伐採した木を運び出すとき、材木を乾燥させるとき、棟上げのときなどです。こうした場面で50人の互助会員が労力を提供し、人件費を下げるのです。

12月、互助会で建てた第一号の入谷の松野や食堂が完成しました。普通なら4人必要な大工さんを2人にして、みんな木材の運搬や板張り、断熱材の積み込みや屋根や床下に詰め込む作業を手伝いました。全部で1000人工（1人1日1人の労働力）をひねり出し、建設費を100万円以上下げることができ、その他の寄付や支援を含めて、坪50万円の目標を達成できました。

互助会だけでなく、都会の大学生や大工見習いなど外部の人材を巻き込まないと持続は難しいと思いますが、ようやく活路が見えてきました。

南三陸での復興住宅に挑戦

互助会作りコスト大幅圧縮

ルは1坪60万円。被災地でのハウスメーカーの家が1坪70万円に高騰していますから、それに比べると割安のつもりだったので。政府からの支援金等を合わせても最大700万円程度で、被災者が家を

木の家が優しさ伝える ⑤

学

ぶ

2013年3月に筑波大学教授を退職し、今は「板倉の家」の普及を目指す里山建築研究所の仕事に専念している。家を建てるだけでなく林業と建築業を軸に里山資源を生かした循環型の地域経済を興す試みだ。

板倉構法は普通の住宅の3倍の木材を使います。よく「木をたくさん伐採するので環境に悪いのではないか」と聞かれますが、実際は逆なのです。

二酸化炭素を大量に吸収するのは成長期の木です。適度な伐採は、林を若く保つ効果があります。林の手入れが行き届けば水が豊かになり、海もよみがえります。

森林資源の活用は地域経済の再生にも役立ちます。宮城県南三陸町にもかつては約20社の製材所がありました。いまは4社しかない。しかし南三陸には7000杉の林が

筑波大学名誉教授

あんど うくにひろ
安藤 邦広 さん



あり、自分たちの家を自給するだけの森林資源は十分あります。

「板倉の家」のまきストーブやまきボイラーで、暖を取り、給湯すれば石油に頼らなくて済みます。

日本は森林

国でありながら、木材の自給率は25%。また、森林資源のエネルギー使用量に占める割合は1%以下で、欧米の森林国と比べると、1桁低い水準にとどまっています。自国や地域の資源をもっと活用すべきなのです。

林は伐採してこそ若さ保つ

建築の多様性を取り戻そう



規格化・均質化された建築に豊かさを取り戻したい

て多様です。都市化が進み戦乱が多かった西日本では火に強い土蔵造りが発達しましたが、東北には板倉造りが残っている。歴史を背景にした違った豊かさがあるのです。

しかし高度成長の中で日本の建築は効率を高めるため規格化・均質化され、豊

東北育ちの私は大学で九州に行ったとき、めんたいこを食べられませんでした。衣食住も言葉も東北と九州では大違いでした。

南北に細長い日本列島にはそれほど多様な気候風土に合わせ、建築も気候風土に合わせ

に増え、年間に約500棟が建つようになりました。地元の木を使って人と環境にやさしい家を建てる動きが広がっています。最初は終(つい)のすみかを求める中高年が多かったのですが、今は子供のシックハウス症候群に悩む子育て世代が増えています。

心配なのは国が検討している新たな規制です。国土交通省は新築の家に断熱材の使用など高い省エネ基準を満たすことを義務付けようとしています。木材利用はそもそも省エネです。また、省エネにあたって高断熱化を図るだけではなく、伝統に学んで地域的に多様な創意工夫をするのが真の省エネにつながるはず。

木造の文化と技術の復活への道のりはまだ半ばです。

次回は薩摩切子職人の中根 櫻龜(おうき)さん